

「底が突き抜けた」時代の歩き方⁴⁴³

考えない映画『華氏911』 考える映画『フォッグ・オブ・ウォー』

マイケル・ムーア監督（40）の映画『華氏911』は、近未来の焚書^{ぶんしょ}の全体主義社会を描いたブラッドベリの『華氏451度』のタイトルに似せて題名が付けられている。紙が自然に燃える温度が「華氏451度」なら、自由を燃えつくす温度が「華氏911」であるというわけだ。思想統制によって読むことも書くことも禁じられている社会で、書物が発見されると消防隊の身なりをした集団が火を消すためにではなく、摘発した書物を燃やすために出動する世界が、『華氏451』では描かれている。この小説を映画化したフランスのトリュフォー監督は、「世界中、どこの国でも、いまなお、書物は迫害され、没収され、ときには（略）路上で燃やされる」「この物語はかならずしも未来の空想社会の出来事ではなく、『いつ』の話でも、『どこ』の話でもいいのである」と書いているという（『天声人語』04.5.9付朝日）。

日本では、「書物は迫害され、没収され、ときには（略）路上で燃やされる」ことはないけれども、無関心^{むかんしん}というかたちで「書物は迫害され、没収され、ときには（略）路上で燃やされ」ている。要するに、「考える」ということがされなくなった。人間から「考える」ことが消え去っていくなら、人間は人間でなくなるとどこへ行きつくのだろうか。いうまでもなく書物には、言葉で「考える」ことが詰まっている。「書物は迫害され、没収され」るほど、「考える」ことが危険視されるということは、「考える」人々が多数存在し、彼らは書物をたえず求めているということの意味しており、まだ救いがあるといえよう。しかし、いまや現代社会では人々が書物を強く求めなくなったことによって、「書物は迫害され、没収され」るに足るほどのものではなくなってしまった。書物はただ単に言葉が一杯詰まっているモノにしかすぎなくなったようにみえる。では映画もまた、ただ単に膨大な映像と台詞が詰まっているモノにしかすぎないのだろうか。もちろん、そんなことはありえない。

書物も映画も訴えてくる力を秘めている。書物や映画に向き合うなら、それらの力は誰にでも伝わってくるにちがいない。それらの訴えてくる力に大きさの違いがあっても、向き合うことによって書物や映画が訴える力ははっきりと伝わってくる。このことは裏返せば、向き合わなければそれらが訴えるなにかも迫り上ってこないということだ。そうすると、ここで問われていることは、「向き合う」ということではないのか。つまり、人々が「考える」ことをしなくなったのは、人々が「向き合う」ことをしなくなったためである。では、「向き合う」とはどういうことであるか。書物の前に立ち、映画の前に立ち、他人の前に立ち、自分の前に立つことにほかならない。立ってなにを

するのか。書物や映画や他人の前に立って、それらから発されてくるものを受け入れることである。受け入れるためにその前に立つことが、「向き合う」ことなのだ。

したがって、「向き合う」ことは自分を開いて、交流しようとする一つの力強い意思なのである。「向き合う」ことが当然に思えながらも、現在ますます困難になりつつあるのは、人々が「向き合う」という力強い意思を発揮しなくなって、誰とも何とも交流しなくなり、自分自身とすら交流しなくなり、閉ざされていこうとしているからだ。自分自身を殺しつつある途への傾斜といってよい。人間の自然な性向からすれば、人間は本来的に開かれるよりも、閉じるように出来上がっているとどうしても思われる。いうまでもなく閉じる方向は自滅である。自滅を回避するために開くという力強い意思を、人間は発揮しなければならなくなった。同時に、開くことが生きることであり、生きることは自分を開くことであるというふうにまで高めていった。その結果、生きることは生きる意思を必要とすることに気づくようになり、そのような社会を築きあげてきた。

生きることに生きる意思が漲^{みなぎ}っていなければ、人間は生きていけなくなっているという当たり前のことを改めて思い返すなら、人々に「向き合う」姿勢が欠如しつつあることは、生きる意思の衰退にほかならない。戦争の頻発も暴力の横行も、社会が荒廃しているという事態はすべて、人間の生きる意思の衰退のあらわれであろう。「向き合う」ことの困難さがそこには剥き出しにされている。「向き合う」姿勢が相互に徹底されていれば、戦争にしる暴力にしる、あらゆる衝突の回避はそれほど困難ではない。衝突は交流の断絶によって、「向き合う」ことの撤退を明示している。いいかえれば、「向き合う」ことが対象にむかってその中へ一歩「踏み出す」ことにならずに、「向き合う」姿勢が自分の中にかたちづくられないまま、破壊の意思が突き出されてくることによって衝突が起こり、戦争が不可避な様相を伴って勃発するに至る。

正しい戦争はあるか、と問うべきではない。あらゆる戦争が敗北である。戦争の勝利とは戦闘の勝利にすぎず、戦争のかたちをとって事態の打開を図らざるをえなかったことの交流の断絶という、人類にとっての敗北をなんら覆すものではない。戦争という敗北の事態の中での戦闘の勝利にすぎないのだ。戦争が諸悪の根源であるのは、自分と異なる相手を敵とみなすことによって、敵との交流ではなく、敵の殲滅を図ることこそが最大の目標とされるからである。「向き合う」ことによって相手の場所へ「踏み出す」のではなく、「向き合う」べき対象そのものを滅却することによって、人間から「向き合う」という力強い生の意思を発揮しなければならない機会そのものをも滅却するという致命的な罪悪を犯しているのだ。我々人間から「向き合う」という、生きる上での基本的で不可欠な姿態を除去してしまうなら、自分以外の人間や生物をすべて敵とみなして除去に努め、最後には自分自身を敵とみなさざるをえなくなる場所へと連れ出されていく。

書物や映画の世界にもう一度戻ろう。他人や自分に「向き合う」なら、他人や自分から言葉やある仕草が発されてくるように、書物や映画に「向き合う」なら、必ず書物や

映画もなにかを語りかけてくる。私が書物や映画に「向き合う」なら、書物や映画も私に「向き合う」からだ。先にもいったが、「向き合う」ことは「踏み出す」ことである。書物や映画が私になにかを語りかけてくるのは、私が書物や映画の中に踏み出しているからだ。それだけではない。書物や映画のほうも私の中に踏み出しているのである。そのときに読んだり観たりする体験が隆起してくる。私は書物や映画の中で生き、書物や映画も私の中で生きるということだ。我々はあらゆる場所や関係で生きることを願っているが、そのためにはあらゆる場所や関係に向き合い、一步を踏み出さなければならぬ、あらゆる場所や関係が私の中に迫り出してくるように歩きださなくてはならない。

今年の第57回カンヌ国際映画祭で最高賞パルムドールを受賞した映画『華氏911』と私はどのように向き合い、どのように踏み出していったかといえば、双方が「向き合う」ことが少なく、したがって「踏み出す」ことがわずかだったといわざるをえない。要するに、大きく「考える」ことを求めている私からすれば、それは前作『ボウリング・フォー・コロンバイン』にもはるかに及ばない、考えさせてくれることの量の少なさにおいて、映画そのものの質、水準においてよくなかった。この評価はゴダール監督が「ブッシュはムアアが考えているほどおろかではない」と批判したり、ブッシュ政権が用いているのと全く同じの「デマゴギー（扇動主義）ポピュリズム（民衆主義）」と仏国内で批判する評論家が多かったこととも重なり、ムアア監督自身が「（作品は）金曜の夜にポップコーンをかじりながら見るもの」で、ほとんど思考の量を必要としないことをコメントしていることにも裏付けられている。

では、その程度の映画になぜカンヌ映画祭でパルムドールが与えられることになったのか、という疑問が当然湧き起こってくる。「政治が芸術に優先した」などの反響に対して、審査委員長のタランティーノ監督が記者会見で「政治」を否定し、「フランス人審査員は（委員長を除く）8人中1人だった」ことを述べて、フランスの政治的意図でないことを強調する一幕もあった。しかしながら、パルムドールにふさわしい質と内容を備えた作品とはいいがたいことは歴然としていたから、パルムドールが発表された5月22日夜の式典で総立ちの喝采が起きた光景を評して、フランスのリベラシオン紙が「ブッシュにミサイル」、フィガロ紙が「政治受賞の幕開け」とかしましく、イタリアのコリエレ・セラ紙はイラク攻撃をめぐる米仏関係の対立を念頭に、「大西洋の間の敵対関係に新たな論争が認識された」と指摘し、スペインのABC紙も、「政治的または世界的平和のセンスが大きな一步を示した」と書いた。

前回の米大統領選を含む9・11以降のブッシュ大統領を批判しつつけるムアア監督の作品が、パルムドールに値する映画であるかどうか大きな疑問が残るから、「政治が芸術に優先した」などと騒がれるのである。映画祭の立場からすれば、おそらく出品されていた『華氏911』以上に優れた作品にパルムドールを与えるべきであった。ところが、ムアア監督の『華氏911』は他の出品作品と同一に並べて論じることのできない、米大統領選を前にして本国での上映が配給会社の決定で中止になっているという

背景をかかえこんでいたのである。おそらく審査委員たちは政治圧力によって上映中止にまで追い込まれている映画の状況の前に立たされ、のどかに映画の作品としての質や水準のみを論じ合い、吟味するだけではもはや済まされなくなっていたのだ。

いうまでもなく書物は出版されて読者の手に届く機会が閉ざされてはならないように、映画もまた上映中止に追い込まれて、観客の観る機会が閉ざされるようなことがあってはならない。読者が書物を手にして判断する機会が奪われてはならないように、観客が映画を観て判断する機会を奪われてはならない。民主主義社会とはそういうものであり、イラクに民主主義を輸出しようとして攻撃を仕掛けたアメリカが、国内で自国大統領を批判する内容の映画が配給会社の決定で中止に追い込まれるという事態に、映画関係者の誰もが座視していい筈がなかった。もしこの事態を座視するなら、上映中止に追い込まれた作品にとって映画祭などは単なる余興にすぎず、なんの意味もなかった。カンヌ国際映画祭の審査委員たちはそう考えたにちがいない。上映中止に追い込まれた作品を前に、作品の優劣のみをこれまでと同じように審査することは、事態を回避する点で怠慢であったし、映画が向き合わなくてはならない世界から目を閉ざそうとする点で愚劣でもあった。

映画『華氏911』はその内容において上映中止という現実的な事態を招くことによって、その事態をも作品そのものの内容としてしまったのである。審査委員たちはおそらくそう捉えた。映画の内容が現実的な事態にまではみだすことを余儀なくされたのであれば、映画に対する審査もまた作品という枠組みを超えて、現実的な事態にまではみだすことを余儀なくされねばならない。審査委員長のタランティーノ監督を筆頭とする審査委員たちが、ムーア監督の『華氏911』にパルムドール受賞を決定したとき、それはその作品にパルムドールを与えたというよりも、上映中止に追い込まれた作品と共にパルムドールも抗議の意思を表明しただけでなく、パルムドールは上映中止の苦境を突破する支援の意思をも明確にしたのである。

もう少し突っ込んで考えてみることもできる。映画『華氏911』は冒頭でも述べたように、書物が危険視されるブラッドベリの『華氏451度』のタイトルを真似ているが、『華氏911』はそれにとどまらず、実際に上映中止を招き寄せることによって、自由を燃え尽くす温度を現実を示してみせたのである。タランティーノ監督ら審査員たちは、民主主義国家で上映中止という事態を招き寄せるほどの、国家権力にとって危険な力を『華氏911』が内蔵しているインパクトを積極的に評価したのかもしれない。作品としての力を単に作品としての内容に限定せずに、国家権力による圧力をも引き出すほどの強力な反抗性に見出したのかもしれない。「受賞は政治的ではない。最高の作品だったからだ」という審査委員長であるタランティーノ監督の弁には、もしかすると『華氏911』はどの作品も持ちえていない毒を充溢させている点で、「最高の作品だった」という意味がこめられていたのかもしれない。

映画『華氏911』は2000年の冒頭から始まる。ブッシュの勝利は弟が知事を務

めるフロリダ州での不正な集計作業と、ブッシュのいところが報道責任者を務めるFOXテレビが、いかにしてアル・ゴアの勝利を引っくり返したか、から始まり、ブッシュが資格のない大統領であることが強調される。当選したブッシュがバカンスに出かけ、脳天気釣りやゴルフを楽しむ映像が映し出され、ゴルフを楽しむ姿をバックに「自分の時間の42%を休暇に費やしている」というテロップが現れる。この時点で、米連邦捜査局(FBI)はアルカイダによるテロの可能性を報告していたのに、なぜかブッシュは対策に着手しなかったと疑問を投げかけ、アメリカの巨大投資会社カーライル・グループに、ブッシュ家とビンラディン家が石油事業に絡んで深くかかわっていた事実が浮き彫りにされる。オイル企業だけでなく、軍事企業なども絡んでイラク復興での一稼ぎにたむろする企業群との密接な関係が炙りだされる。

イラク侵攻が自由と民主主義のための戦いに名を借りた、ブッシュ族にかかわる企業群を儲けさせるための攻撃でしかなく、しかもその戦争によってサウジ王家とビジネス上の特別のつながりを持つビンラディン一族も儲けていると主張し、9・11テロの翌日、ビンラディン一族24人が厳戒態勢が敷かれる中、FBIの取り調べを受けることもなく、堂々と特別機で出国した事実を暴露する。映画はこのような手法で主に、ムーア監督が集めてきたニュース映像と、フリーランスのカメラマンを米軍に潜入させて撮った独自映像をもとに構成されており、民間軍事企業の米国人の遺体をイラク人がなぶりものにするファルージャでの衝撃シーンや、頭に袋を被せたイラク人捕虜に対する米兵による拷問映像など、放映されなかったニュース映像も盛り込まれている。「テレビゲームよりずっと暴力的だ」と語る若い兵士や、「鼻を吹き飛ばされた少女や、死んだ妻を運ぶ夫」を見たと語る兵士の声と共に、イラク戦争で負傷した兵士たちがリハビリを行う病院にも潜入して、目撃した惨劇を苦悩の表情で語る元兵士たちのインタビューも収められている。

開戦前のバグダッドの公園の滑り台で子どもが無邪気に遊んでいるシーンから画面は変わって、爆弾音とともに破壊される街の中でトラックに投げ込まれた子供の丸焦げの死体が映し出され、イラク人が「この子がどんな罪を犯したんだ」と叫ぶシーンもある。他にもいくつかの印象的な場面が脳裡に浮かんでくる。9・11当日の映像シーンでは、映画は世界中のテレビで繰り返されたあの映像を流さなかった。代わりに、暗闇の中で二機の飛行機が世界貿易センタービルに激突する音や悲鳴だけが響く映像を映し出した。つまり、一分10秒間だけ映像を隠した。スクリーンの中の暗闇と映画館の暗闇が重なり合い、観客は暗闇の中の被害者と同様に、一瞬飛行機の激突映像の音と悲鳴を味わっていたのである。ムーア監督は我々観客の観る行為を遮断することによって、観えない映像を我々に喚起したのだ。

前作『ボウリング・フォー・コロンバイン』とも連続するテーマであるが、ヘッドホンでロックを聞きながらゲーム感覚で標的を狙う戦場の若いアメリカ兵が供給される背景を追うために、ムーア監督が故郷のミシガン州フリントに戻る映画の後半も忘れがた

いシーンである。米中西部のこの町はかつての重工業地帯に位置する人口12万5千の貧しい町で、ムーア自身、故郷を離れるまでは年収が1万7千ドルを超えたことはなかったというほどの「忘れられたアメリカ」に沈んでおり、因みに住民の平均年間所得は1万6千ドルとのこと。彼の少年時代は軍用車両や自家用車の工場生産で、町は活気に満ちていたが、70年代の日本車の「侵略」と80年代の工場閉鎖 - 大量解雇によって、すっかり荒廃した町になっていた。このような空き家ばかりのゴーストタウンが目立ち、失業率が17%の地域に住む若者たちが生きるために、兵士として雇われていくのだ。

ショッピングセンターをうろついている職のない若者たちに、海兵隊の新兵募集官が近づいて「イラクに行かないか」と次々に声をかける場面が映し出され、ためらう若者に巧みな話術と甘言で若者を誘い込む。フロントで国を愛する女性のもとにイラクで戦死した息子から送られてきた最後の手紙で、「僕は騙された」と書かれているのを読んで彼女が泣き崩れる悲痛なシーンもあり、その手紙にはまた、「あのばか(ブッシュ大統領)」を落選させたい、とも書かれていた。彼女はムーア監督と共にホワイトハウスの前に立ち、アメリカのために死ぬ名誉ばかりを語るブッシュ政権のもとで、連邦議会535議員のうち、息子を兵士としてイラクに送っているのはたった一人しかいない事実を怒るムーア監督は、議会前の路上で議員たちに突撃インタビューを試みる。「議員の子供こそ真っ先にイラクに行くべきではないか」と訴える監督に、議員は冷たい反応を返し、足早に去っていく。

『華氏911』はブッシュ再選を阻止するどころか、再選を手助けするとジャン・リュック・ゴダール監督が批判したのは、それが「ブッシュに投票するな」という主張の一点に、映像が盛り沢山に詰め込まれて収斂していくだけの単純な手法を取っているからであり、その手法自体ブッシュ得意の手法にほかならなかったからだ。「映画で世界を考える」前衛に立つゴダールからすれば、ブッシュの手法をもってブッシュを批判すること自体、自らがブッシュになることではないか、という意味合いであったと思われるが、しかしながら、ムーアからすれば、ブッシュ的な単純な手法だからこそ映画は大受けして、「ブッシュに騙されるな」のキャンペーンを広めることができるということだろう、考える映画では大動員が期待できない、と。ゴダールはだからこそ、ダメなんだ、そんな考えない水準でブッシュ再選を仮に一時的に阻止したとしても、ブッシュのような人物が大統領として選出されるようなあまりにもアメリカ的な土壌に全く抗うことができなければ、何の意味もないではないか、という主張だと思われる。

ゴダールが「ブッシュはムーアが考えているほどおろかではない」と批判するのも、ブッシュの愚かさはアメリカという国の負の部分を押倒的に体現していることを見抜いているからだと思う。一人のブッシュではなく、無数の大小のブッシュを生み出しているアメリカという強固な土壌を相手にするのはなかなか厄介であり、ムーアは自分の中のブッシュ的要素をどう克服することができるのか、もっと深く考えたほうがいい、という警告を含んでいたのではなかったか。もう一つ、作家の渡辺淳一が誰も注目して

いなかった場面について、『週刊新潮』の連載エッセイ（04.9.9）の中でこう触れている。「それよりわたしが呆れて、かつ怖くなったのは、イラク戦争への突入やアルカイダとの戦いなど、世界を揺るがす大事件の決定が、その場にいたごく少数の人達の意見と雰囲気、呆気なく下されることである。」

最近のテレビで62年のキューバ危機に直面した当時のケネディ大統領を中心とするホワイトハウスの動きを描いた映画『13デイズ』を観たことにかかわっていえば、キューバ危機の際の大統領がもしブッシュであったならば、ソ連の核ミサイルが持ち込まれたキューバにアメリカは即時に侵攻し、ソ連との間に壊滅的な核戦争を惹き起こしていたことは疑う余地はないし、同様に9・11以降のアメリカの大統領がもしケネディであったならば、アフガニスタン空爆はともかく、100%イラク攻撃はありえなかったと推測される。大統領の思慮深さがキューバ危機を乗り越える大きな要因になったし、逆に大統領のあまりもの思慮不足がイラク攻撃を惹き起こしたことは明白だからだ。『華氏911』とほぼ同時期に世界で上映された映画『フォッグ・オブ・ウォー』を観ると、つくづくそう思われてくるし、同じドキュメンタリー映画である『華氏911』とどうしても比較せずにはいられなくなる。

映画『フォッグ・オブ・ウォー』には「マクナマラ元米国防長官の告白」というタイトルが入っているように、ベトナム戦争初期の米国防長官を務めたロバート・ストレンジ・マクナマラ（1916年生まれ）に対する23時間に及ぶインタビューを中心に、アメリカ現代史の暗闇に迫る構成になっている。監督はエロール・モリスで、03年度のアカデミー賞で長編ドキュメンタリー部門の最優秀作品賞を受賞している。01年春にマクナマラとコンタクトを取ってインタビューが始まったこの作品は、おそらく9・11以前に撮影を終えていたこともあってか、9・11への言及は当然含まれていない。題名の「戦争の霧」とはマクナマラによれば、中国の古典に出てくる言葉で、いったん戦争の危機が起きると、どんなに賢明な政治家でも、冷静で合理的な判断力を失い、まるで深い霧に包まれたように混乱した行動を取る、という意味らしい。

「自分は生涯を通じて戦争の一部だった」としみじみ述懐する今年88歳のマクナマラは、名門ハーバード大学を卒業すると同時に、経営管理の専門家として同大学史上最年少の助教授に任用され、戦後若干30歳にしてフォード社に取締役として入社し、44歳で同社の社長に就任するも、その7週間後にケネディ大統領に請われて、電撃的に大国アメリカの安全保障を統括する国防長官の職に就く。アメリカ社会のエリート中のエリート街道を突っ走った彼の生涯は、第一次大戦のさなかに生まれた彼が29歳の時に陸軍中佐として第二次大戦に従軍、46歳の時に国防長官としてキューバ危機に直面し、49歳の時に同じ国防長官としてベトナム戦争に踏み切るといのように、歴史的な地獄に身をもって深くかかわっている。彼がそれらの大事件にどのようなかたちでコミットしていたのか、をまずは追って行く。

マクナマラの軍歴でなんといっても注意を引くのは、マリアナ諸島を拠点とする第2

0 航空団に所属していた彼は、司令官のカーチス・ルメイ少将から統計管理の知識を見込まれ、昭和19年秋から始まっていた日本本土への長距離爆撃（最初はB24、次にB29）による効果の改善策を命じられ、地上からの対空砲火による被害を避けるために、高度7千メートルから通常爆弾を軍事目標めがけて投下していたそれまでの爆撃方法を改め、ドイツのドレスデンに対する英空軍の無差別爆撃などを参考にして、B29爆撃機による低空からの都市住民をターゲットにした夜間攻撃を勧告したことである。その最大の成果が翌20年3月9日深夜から10日未明にかけて行われた東京大空襲であり、焼夷弾による無差別絨毯爆撃で一夜にして10万人を超す死者を出し、これ以後大阪、名古屋、福岡などの都市が同じ爆撃方法で攻撃された。同じルメイの指揮下で広島、長崎への原爆投下が行われたこともけっして忘れるべきではない。

この東京大空襲の時、12、3歳であった作家の小林信彦は、9・11以降のアメリカによるアフガニスタン空爆やイラク攻撃によって少年時の体験を直撃されることになったのか、「3・10を忘れない」という文章をいくつかしつこく書き留めているのが目につく。『週刊文春』の連載エッセイ（03・3・20）でこう書いている。

《昭和20年3月10日といえば、戦争末期である。しかし、まだ、ヒロシマ、ナガサキまでは5カ月近くある。

米軍の東京爆撃は、前年の11月からおこなわれていた。しかし、それは確信的な非戦闘員虐殺ではなかった。

では、翌年3月10日までの間に、何があつたのか？

1945年の2月13日夜から14日朝にかけておこなわれた英米空軍によるドレスデン爆撃である。ドイツでもっとも美しい都市の一つであるドレスデンは一夜で灰になり、捕虜としてドレスデンにいたアメリカ兵までが生死の境をさまよった。（…）この爆撃は1963年まで歴史からかくされていた。死者は控え目にみて13万5千人といわれる。》

E・バートレット・カーの『東京大空襲 B29から見た3月10日の真実』（光人社NF文庫）の記述を引用しながら、続ける。ドレスデン爆撃に関して、《アメリカの新聞は「今後、一般市民（非戦闘員）までも爆撃の対象にするのか？」と疑問を呈していた》が、グアム島でドレスデン爆撃の記事を熟読していたルメイ少将は、手加減することなど必要ない。戦争とはもとより破壊的で、非人間的かつ無慈悲なものなのだというのが本音だったので、ドレスデン爆撃をお手本にして《焼夷弾による都市爆撃をおこなうべきだと考えた》。ルメイがそう考えたのは、すでに実験済みであったからだ。《1943年（昭和18年）3月、ユタ州の砂漠に、日本の二階建て長屋12棟が建てられた。

畳はハワイの日系人家庭、日本料理屋からとり寄せ、日本と同湿度の下に保管され、ユタ州まで運ばれた。長屋の中には、卓袱台、座布団、台所用品が置かれ、狭い露地まで作られた。

三種類の焼夷弾による実験は大成功で、木と紙の家は瞬時に燃えた。最新のM69焼夷弾は日本の住宅にもっとも向いていた。

ルメイ少将は3月10日(日本では 陸軍記念日)を待つだけだった。

図面上での爆撃目標は、北は上野、浅草、東は錦糸公園付近、西はお茶の水駅、南は永大橋付近 - それらの内側、といえば、東京の下町すべてである。》

国民学校(小学校)の6年生だった集団疎開中の筆者は、3月10日に東京に帰る予定だったが、東京下町の実家は焼き払われていた。同エッセイの04・3・25付版では、78年製作のNHKの再放送番組「東京大空襲」(3月7日)に基づいてこう記している。ヒントを得たといわれるドレスデン爆撃の《蛮行がなくても、38歳のルメイ少将は対日戦略を変えたのではないか。

「東京に低空飛行で侵入し、ナパーム弾をぶち込みたい」

彼は2月25日にこの考えをテストしている。ボーイングB29229機による焼夷弾の大規模爆撃。

この 成功 で、彼は3月10日の大空襲を企画する。命令書の作成は3月7日だった。ワシントンへは報告せず、ルメイが独断でやった、とNHKのナレーションはいう。》

この大空襲によって10万人以上が殺されるが、700万人といわれていた当時の東京の人口は《疎開その他で、昭和20年3月には506万人になっていた。(…)3月10日の二時間余りの空襲で、10万人以上が殺されたとすれば、50分の1の都民が殺されたことになる。

さらに、ルメイ少将の作った 爆撃目標地域 = 下町 に住んでいたのが当時130万人であることを考えると、10万人以上の殺戮^{さつりく}というのが、いかに途方もないものかわかるだろう。》

前出のカーの『東京大空襲』の翻訳に悩んだ大谷勲によれば、当夜の焼夷弾の大半はM69(ナパーム弾)で、爆撃に参加したB29は325機。3月10日午前零時15分から午前2時半までに降った36万1855発の 焼夷弾の雨 が、つまり、毎秒45発が2時間15分の間に投下された。次のような証言を引きながら、筆者は9・11以降、3・10東京大空襲に固執する理由も覗かせている。

《 - 言問橋^{ことといばし}が逃げる人たちで詰まっちゃった。それに端の方から、パツ、パツと火がつくと、イルミネーションみたいになっちゃうんだ。

- 一人の男が「ワッショイ、ワッショイ」と叫びながら、燃えて走っていたよ。

墨田区立菊川国民学校(小学校)の生徒は、集団疎開先の千葉から3月1日に帰り、半分以上が焼死した。狙いを定めずに、爆弾、焼夷弾をおとす この空爆は、大量兵器による一般市民への無差別爆撃の時代に人類が突入したことだ、と大谷勲氏は記している。

カーティス・E・ルメイの日本人憎悪と入種差別に発した3月10日の大虐殺は、ヒロシマ、ナガサキ - そして、朝鮮戦争、ヴェトナム戦争、最近のアフガン侵攻、イラ

ク侵攻へと続くものの原型だと思う。殺される側に白人はいない。》

NHK特集「東京大空襲」のラストで、引退生活を送っている71歳のルメイにスタッフが、「なぜあの地域を爆撃にえらんだのか」と質問すると、《ルメイは答えず、多くの勲章の撮影だけを許可する》。カメラはその中から、《航空自衛隊の育成に貢献したとして、昭和39年12月4日に、天皇（昭和天皇）からあたえられた》勲一等旭日大綬賞をクローズアップして見せる。後にマクナマラは「戦争で勝つためなら、一晩で10万人もの市民を殺してもよかったのだろうか？ われわれは戦争犯罪人だった」と語る。広島、長崎への原爆投下と共に司令官のルメイや、彼の片腕として爆撃計画に参加したマクナマラが「戦争犯罪人」として告発されなかったのは、ただ単に戦争の勝利者であったからであり、にもかかわらず、戦死者に対する「戦争犯罪人」の位置は免れえないという覚醒をもちつつも、マクナマラは最後まで個人としての謝罪はしない。

この戦争犯罪の最大の張本人であるルメイに、敗戦の15年目に日本政府が最高の勲章を贈ったというのであるから、同じ日本人ながら我々は何という国民なのだろうという思いが突き上げてくる。お人よし、いくじなし、間抜け、腰抜け、奴隷根性、卑屈者……といった言葉が次々に浮かんでくるが、彼に殺された死者たちがルメイに天皇から勲章を与えられる光景を見たら、どのように慟哭するだろう。自分たちが殺されたことが勲章に値するというのであれば、あんまりではないかという無念の悲痛が私の胸に押し迫ってくる。もちろん、戦争なのであるから感傷や情緒がそこに付け入る余地はない。

手加減することなど必要ない。戦争とはもとより破壊的で、非人間的かつ無慈悲なものなのだ という本音剥き出しの攻撃に、こちら側としては何もいえないかもしれない。それはそれでよい。しかしながら、勲章はないだろう。そこまで卑屈にならなければならないのか。戦後の日本人は去勢されてしまったかのように、イラク自衛隊派兵までずっとこの卑屈さに付きまとい、小泉首相などは得意気にブッシュに尻尾を振ることが常態化してしまっているほどなのだ。

ルメイとマクナマラの関係は戦後、マクナマラがケネディ新政権の国防長官を務めた時、太平洋戦争末期に彼の上司であったルメイ少将は、空軍参謀総長として彼の部下になっており、キューバ危機ではソ連との軍事対決を強硬に主張するルメイ大將を、マクナマラがケネディと一緒に押さえ込んだりした。さて映画『フォッグ・オブ・ウォー』であるが、監督のエロール・モリスは95年に刊行された『マクナマラ回顧録』を読んで、《マクナマラ自身や他の人々が、なぜ悲惨な戦争を起こす過ちを犯してしまったのか、理解しようとする姿勢を感じ》、学生時代にベトナム反戦デモに参加していたモリスは、《彼個人の感情を知りたくなかった》と、インタビュー（映画パンフ）に答えている。モリスからすれば、マクナマラがベトナム戦争は「間違った政策だった」と言いながらも、けっしてそのことを個人として謝罪しようとしないうる場所に、踏み入らなければならないものを感じたということだ。

同じインタビューでモリスはそのことについて、こんないいかたもしている。

『マクナマラ回顧録』を読んだとき、彼が謝罪の意を表していないのが本の弱点だと思ったが、いまはその点こそが本の強さ、長所の一つだと考えている。謝罪もさることながら、過ちの原因を究明することは遙かに難しいことだからだ。私は実際に「あなたはどの程度（ベトナム戦争拡大の）計画の責任を負っていると感じています？あるいは、自分はコントロール不可能な出来事の一つの歯車だったと感じていますか？」と尋ねた。全編の核をなす質問はこれだ。マクナマラは大統領に仕えようと務めたのだと答えた。言い逃れのように響くかもしれないが、実のところ、それが真実なのだ。

『フォッグ・オブ・ウォー マクナマラ元米国防長官の告白』の根底にあるのは、人間には常に間違いを犯す可能性がある、という確信だ。映画の冒頭でマクナマラもそう述べている。人間は何度でも同じ過ちを犯すのだ。》

謝罪して一体、なんになるという疑問が先に立つ。なによりも謝罪すべき真の対象はすでに不在であり、謝罪によってなにかが明らかになることはありえないからだ。謝罪しなければ自分の気が済まないということであれば、自分の気を済ませるために謝罪するのは自己本位であって、謝罪してもなにも済まされない深みに自分が立っていることに気づくべきなのであり、謝罪以上のところに自分が押し出されていることをマクナマラは自覚しているように思われる。謝罪の誘惑に耐えて自分の責任をどこで行使するのかが、自分を超越する死者たちから不断に問われていたのである。

モリスはこの映画の根底には、「我々は戦争を起こしたり人を殺したりする運命にあるのだろうか？」という疑問が流れており、《私の全作品に長所があるとしたら、答のない質問を扱っていることだろう。観客はその問いについて、後々まで問題意識を持ち続けてくれる》と語り、今回の映画が「我々は過去の過ちを繰り返す運命にあるのか？」という問題を提示していることからすれば、《戦争は戦争を終わらせはしない。戦争は解決されない争いを残すだけ、すでに存在する未解決の争いを助長するだけだ。戦争は次なる戦争を導くだけである》というのは、過去の明白な教訓ではないかという。モリスは真摯に考えるために、謝罪することによって自分の責任を押し流そうとしないマクナマラ米国防長官へのインタビューを試み、映画を製作したのに対して、ムーアは考えることよりもブッシュを嗤い、コケにし、大統領から引きずり下ろすために映画を製作したのである。

双方の映画に共通しているのは、大統領としての資質というテーマであろう。『フォッグ・オブ・ウォー』でのキューバ危機やベトナム戦争に臨んだケネディや、ケネディの死後を引き継いだジョンソン、そして『華氏911』でのブッシュというように並べてみると、聡明な大統領はやはり最後の最後まで熟慮を放棄しないし、愚かな大統領は愚かな国策に嵌まって身動きがとれなくなってしまうことが、見事に浮き彫りにされている。その意味でもこの二本の映画はセットとして鑑賞されることによって、より一層の効果をもたらすにちがいない。嗤う映画はその嗤いを風に散らさないためにも、考える映画の中で掬い取られる必要がある。

2004年10月7日記